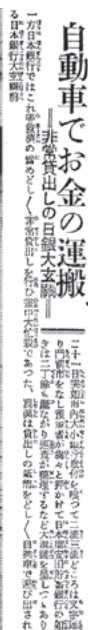




二〇〇九年十一月一日（日）、日本銀行本店において、日本銀行の歴史をテーマとした「市民講座」を開催いたしました。本稿ではその講演の概要についてご紹介させていただきます。

一九二〇年代には、一九二〇年（大正九年）の戦後反動恐慌、一九二二年（大正十一年）の恐慌、そして一九二七年（昭和二年）の昭和金融恐慌と、何度かの金融恐慌が起きます。金融恐慌というのは、銀行に預金していた人たちが、銀行におかねを預けておくことに不安を感じて窓口に殺到する、いわゆる取り付けが起きてしまふことです。

特に、一九二七年の金融恐慌は非常に大規模なものでした。日本銀行は預金者を安心させるため



自動車でお金の運搬

一方日本銀行ではこれら銀貨の増えどしく「実食貨」しをむき、並に中央銀行であつた、買入は買出しの感嘆をどしく「自給率」で表ひ出される日本銀行と空欄附

写真1「銀行券運搬を報じる新聞 一九二七（昭和二）年四月二十四日」（国立国会図書館所蔵）

金融システムの動揺と 日本銀行

一九二〇年代に、日本は金融危機の時代を迎えます。これに先立つ第一次世界大戦（一九一四～一九一八年）の時期に日本は戦場

日本銀行は、日本でただ一つの中央銀行です。中央銀行の仕事を一口で言うと、世の中の人々が「おかね」を安心して使えるようにするということです。本日は、日本銀行の歴史を通して中央銀行の役割についてみていきたいと思います。

にはならず、ヨーロッパの交戦国やそれらの国々の植民地向けの輸出を伸ばし、急速な成長を遂げました。ところが、戦争が終わると、景気が急に悪くなってしまい、不良債権が増えて金融システムが不安定になりました。

預金を通じて決済は、民間銀行の預金口座を使って行われています。預金を通じて決済がうまく行われるためには、銀行の経営が安定し、ひいては銀行同士がつくっているネットワークを預金者が安心して使うことが重要となります（前号コラム「決済の仕事」）。



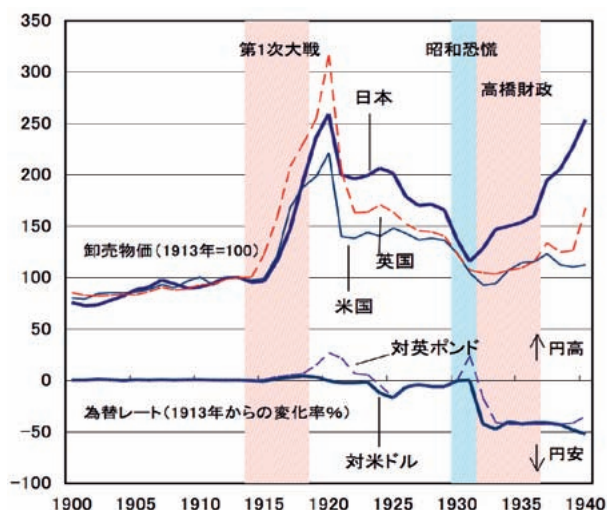
(表)

写真2「日本銀行兌換券乙二百円券（表・裏）」（日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵）



(裏)

図1 日米英3カ国の物価と円為替レート



資料：日本銀行調査統計局『明治以降卸売物価統計』、朝日新聞社『日本経済統計総覧』、大蔵省理財局『金融事項参考書』各年版、U.S. Department of Commerce, Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States*, B. R. Mitchell, *British Historical Statistics*.

に民間銀行に緊急の貸し出しを行いました（写真1）。三月末に五億三九〇〇万円だった日本銀行の貸出残高は、一カ月弱の間に二〇億九六〇〇万円になり、三月末に一三億五五〇〇万円だった日本銀行券の発行高は、約二倍の二六億六〇〇〇万円まで増えました。大量のお札が急に必要になったため、印刷が間に合わず、裏が白紙のままの銀行券も発行されました（写真2）。ピーク時には裏が白紙の銀行券が一億六二〇〇万円、流通量全体の六%ぐらい出回っていたそうです。こうした対

応によって、金融恐慌は収まっていきました。

世界恐慌と高橋財政

一九〇〇年から一九四〇年にかけての日本とアメリカとイギリスの物価をみてみると、第一次世界大戦の前にはおおむね安定していましたが、第一次世界大戦中から戦後にかけて、日本だけではなくアメリカやイギリスも含めて物価が激しく上昇し、その後は急激に下落しています（図1）。一九二〇年代の日本では、継続して物価が下がっていました、

特に一九三〇年代初頭の下落は急激でした。その背景の一つに、日本が、第一次世界大戦中にいったん離脱していた金本位制に一九三〇年に復帰したことが挙げられます。第一次世界大戦中に金本位制から離脱した世界各国は、金本位制への復帰を経済政策の目標にしており、日本は他国に遅れながらも金融恐慌が収束した後の一九三〇年になってようやくその目標を達成したのでした。金本位制に復帰する前の為替レートは第一次世界大戦前に比べて円安になっていましたが、日本は、第一次世界大戦前の為替レートで金本位制に復帰するため、円高政策を採りました。これに加えて、一九二九年のニューヨーク株式市場の暴落を発端として一九三〇年から三一年にかけてヨーロッパとアメリカで大きな金融危機が起き、世界経済は大不況（世界恐慌）に突入していききました。日本は、円高と世界恐慌の影響が重なり、激しい不況とデフレになりました。これは「昭和恐慌」と呼ばれています。

高橋是清は一九三一年末に大

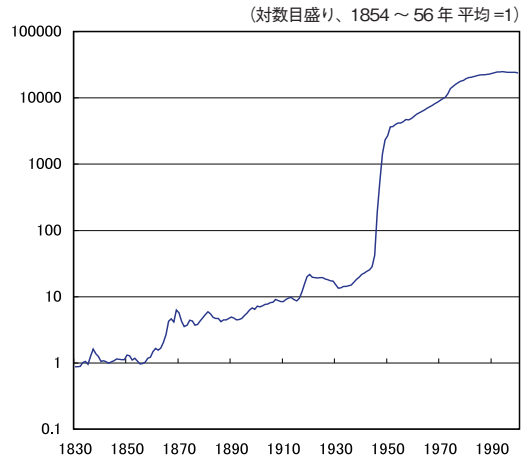
蔵大臣に就任し、一九三六年（昭和十一年）に二・二六事件で暗殺されるまでの四年強の間に、「高橋財政」と呼ばれる大胆な経済政策を行い、日本を経済危機から救ったといわれています。

高橋は、まず金本位制から離脱して大幅な円安にしました。また、国債を日本銀行に引き受けさせ、その資金を原資にして積極的な財政政策を行いました。あわせて、日本銀行は金利を下げて金融緩和を進めました。

これら三つの政策は、経済学の教科書に登場するケインズ政策の先駆けといわれています。ケインズ理論の集大成といわれる『一般理論』が完成したのは高橋が暗殺された一九三六年ですので、その前に高橋はケインズ政策のエッセンスを日本で実践していたということで、世界的に高く評価されています。

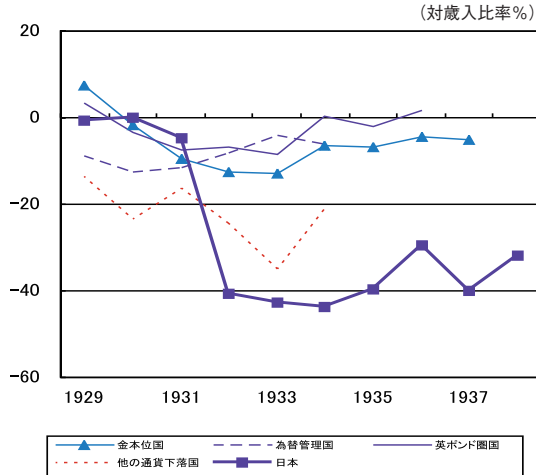
実は、この話はそれで終わりませんでした。第二次世界大戦直後に日本は急激なインフレに見舞われます。一九四五年（昭和二十年）の終戦の年から一九四九年（昭和二十四年）にかけて、物価は約

図2 日本の物価の長期的推移



資料：新保博『近世の物価と経済発展』、大川一司ほか『長期経済統計8 物価』、内閣府『国民経済計算』

図3 中央政府の財政バランスの国際比較



資料：League of Nations[1940], *Statistical Year-Book of the League of Nations, 1939/40*, pp.194-204; Economic Intelligence Service, League of Nations [1937-38], *Public Finance*.

六〇倍になりました(図2)。こうした激しいインフレの直接の原因については、第二次世界大戦中から戦争直後の財政赤字、

具体的には、戦争中の軍事費、戦後の復興費用などを、日本銀行が発行するおかねで調達したため、おかねの量が短期間に急激に増加して、急激なインフレが起きてしまったのだといわれています。デフレが問題とされた一九三〇年代初頭から高々一〇年か一五年後にはインフレが問題となったわけです。

世の中の人々が安心しておかねを使うことができるためには、物価の安定は重要です。この点に関連して、「高橋財政」と第二次世界大戦後のインフレの関係について、研究者や政策担当者の間には、「高橋財政」が財政規律を緩めてしまうきっかけになったのではないかという意見があります。

一九四七年(昭和二十二年)に作られた財政法という法律では、日本銀行による国債の引き受けが原則として禁止されました。当時の法案審議の記録をみると、その理由として、日本銀行が政府から直接国債を引き受けて、政府におかねを渡すようにすると、政府は簡単におかねが手に入るの

で、インフレの原因になるということが挙げられています。

また、旧大蔵省(現在の財務省)が編さんした『昭和財政史』という歴史書では、高橋財政は膨張財政の始まりであったということが書いてあります。

『世界恐慌と経済政策』(鎮目雅人著、二〇〇九年)という本では、日本が一九三〇年に復帰した金本位制というのは、財政に規律を与えるメカニズムだったと説明しています。金本位制は、その国のお札の価値を一定量の金と結び付けるとい制度ですが、際限なく財政赤字を出してお札を発行してしまうと、こうしたお札の価値が保てなくなってしまう、金本位制が維持できなくなります。ですから、金本位制に参加することで、財政規律が保たれていた面があったと考えられます。

高橋が大蔵大臣に復帰して最初に実施したのは金本位制から離脱することでした。実は、その背景には、それまで世界の金本位制の中心となっていたイギリスがすでに金本位制から離脱していたという事情がありました。高橋財政が

開始された時期には、金本位制による財政規律メカニズムは失われてしまっていたわけですが、その後、制度的に財政規律を課すメカニズムは導入されませんでした。その代わり、「高橋財政」の時期には、高橋自身が財政規律を守っていた面がありました。軍部からの予算要求に対して高橋が中心となつて厳しい査定をして予算を削り、それで財政規律を何とか保っていたのです。

国の財政赤字の歳入に対する比率をみてみると(図3)、高橋財政より前の一九三二年までは、日本は他国と同様に、ほぼ均衡財政を続けており、各年度の歳出の大部分を税金で賄い、国債をほとんど発行していませんでした。高橋は、景気が悪いときには国債を発行して支出を拡大させるという財政政策を導入したわけですが、それと同時に、いずれ景気が良くなったら均衡財政に戻すからといって国債を保有する投資家の信認を得ていました。しかしながら、軍部が自らの要求に反対する高橋を暗殺してしまうと、その後は規律がなくなってしまう

(参考) 日本銀行関係年表

西暦	年号	
1868	明治 元	明治政府、「太政官札」発行
1871	4	新貨条例公布 (円制定、金銀貨発行)
1872	5	国立銀行条例公布
1877	10	西南戦争
1882	15	日本銀行条例公布、日本銀行開業
1885	18	日本銀行券 (兌換銀券) 発行開始 (銀本位制)
1896	29	日本銀行本店、日本橋本石町へ新築移転
1897	30	貨幣法公布 (金本位制移行)
1917	大正 6	金輸出禁止 (金本位制停止)
1927	昭和 2	昭和金融恐慌発生
1930	5	金輸出解禁 (金本位制復帰)
1931	6	金輸出再禁止 (管理通貨制移行)
1942	17	(旧) 日本銀行法施行
1946	21	新円切り替え (旧円券を回収、新円券に切り替え)
1949	24	1 ドル = 360 円の為替レート設定
1971	46	「ニクソン・ショック」 (金・ドル交換停止)
1988	63	日銀ネット (当座預金関係事務) 稼働開始
1998	平成 10	改正日本銀行法施行

たと考えられます。

国際金本位制の崩壊によってそれまでの財政規律メカニズムが失われる中で、日本銀行による国債引き受けを伴う財政拡大が行われたことが、財政規律を失わせる結果につながったとの見方ができます。

おわりに

最後に、日本銀行の歴史を通じてみた中央銀行の役割について整理しておきたいと思います。中央銀行の仕事を一口で言うと、世の中の人々がおかねを安心して使えるようにするということです。

第二に、現金である銀行券を発行して、それが全国津々浦々まできちんと流通するようにするということです。日本銀行ができる前は、いろいろな種類のおかねが日本の中で流通していました。日本銀行が設立され、日本銀行券という一つの種類のおかねを日本銀行が民間の金融機関と協力して全国津々浦々に供給するという体制ができていきました。

第二に、効率的で安全な決済システムを運営するということです。明治時代以降、日本銀行の提供する預金を利用することで経済の血液ともいえるおかねを日

本の国内に巡らせる決済システムができていきました。

第三に、金融システムの安定を維持することです。一九二〇年代の金融危機の時代には、民間銀行の預金に対する安心が脅かされたことがありました。このとき日本銀行は、金融危機への対応を通じて、民間銀行のネットワークを国民が安心して使えるようにするという役割を担いました。

そして第四に、物価の安定を維持することです。第二次世界大戦直後の日本のように、おかねの価値がもの凄く下がってしまったたり、逆に上がってしまった

りして、おかねの価値が変動すると、安心しておかねを使うことはできません。ですから、物価の安定を維持することが重要になります。

限られた時間で日本銀行の歴史や中央銀行の役割をすべてお話しすることはできませんでしたが、日本銀行貨幣博物館では、本日お話しした内容を含めて、おかねの歴史を展示しているほか、ホームページでもその一部をご紹介します。ぜひ一度ご覧いただければ幸いです。

*ここに示された意見は執筆者に属し、必ずしも日本銀行の見解を示すものではありません。

日本銀行貨幣博物館のご案内



【交通】

地下鉄銀座線三越前駅 (出口A 5) から徒歩 3 分。
地下鉄半蔵門線三越前駅 (出口B 1) から徒歩 1 分。
JR 東京駅日本橋口から徒歩 10 分。
詳細は、日本銀行 HP をご覧ください。
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/htmls/index.htm>